

武蔵野幕屋 聖書講筵

光体

——ヨハネ第一書第1章——

1957年9月8日

小池辰雄

永遠の生命体 視れども見えず 大事なことは根源相の体験 コイノニアの幕屋構造（三角錐体G・XABC） 祈りも大自然のごとく 渾然有機体的な円環関係 イエスという光体を通して神に直結 キリストが中に入って下さる 観念に非ず、御利益にあらず 御霊の光を受ける場は祈り キリストにおける光体としての存在 祈り

【ヨハネ第一書1章】

1 太初^{はじめ}より有りし所のもの、我等が聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの、即ち生命^{いのち}の言^{ことば}につきて、2——この生命すでに顕れ、われら之を見て証^{あかし}をなし、その曾て父と偕^{いま}に在して、今われらに顕れ給える永遠^{とこしえ}の生命を汝らに告ぐ——3 我らの見しところ聞きし所を汝らに告ぐ、これ汝等をも我らの交際^{まじわり}に与らしめん為なり。我らは父および其の子イエス・キリストの交際^{まじわり}に与るなり。4 此等のことを書き贈るは、我らの喜悅^{よろこび}の満ちん為なり。

5 我らが彼より聞きて、また汝らに告ぐる音信^{おとすれ}は是なり、即ち神は光にして少しの暗き所なし。6 もし神と交際ありと言いて暗きうちを歩まば、我ら偽りて真理^{まこと}を行わざるなり。7 もし神の光のうちに在^{いま}すごとく光のうちに歩まば、我ら互に交際^{まじわり}を得、また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔^{きよ}む。8 もし罪なしと言わば、是みずから欺^{あやむ}けるにて真理われらの中になし。9 もし己の罪を言いあらわさば、神は真実^{まこと}にして正しければ、我らの罪を赦^{ゆる}し、凡ての不義より我らを潔め給わん。10 もし罪を犯したる事なしといわば、これ神を偽者^{いつわりもの}とするなり、神の言われらの中になし。

●永遠の生命体

この前、ペテロ後書第3章、世の終末の音ずれを学んだわけですが、牧会書翰をずうつとやって来たわけですが、今日はヨハネ書翰の第一の書、第1章に入ります。

1 太初^{はじめ}より有りし所のもの、我等が聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの、即ち生命^{いのち}の言^{ことば}につきて、2——この生命すでに顕れ、



われら之を見て証をなし、その曾て父と偕に在して、今われらに顕れ給える
永遠の生命を汝らに告ぐ――

ヨハネ伝と黙示録とヨハネ書翰というものの作者については、いろいろ学者の間に議論もありますけれども、私は端的に使徒ヨハネのものと見ておきます。その使徒ヨハネの実に円熟した心から、自ずから静かに流れ出ているところの泉の如き言であります。

ヨハネは小アジアに伝道しておりまして、小アジアの諸教会に宛てた書翰であると思われませんが、黙示録がそうです。何か前置き式なことを言わないで、いきなり単刀直入に、

「太初より有りし所のもの」

といって、非常にヨハネ的です、こういうところも。いわゆる論理的なものの言い方をしない。断言命法、次から次へと投じていくような言です。

ヨハネ伝の1章は勿論、これと非常に連関があるところでして、ヨハネ伝の1章には

「太初に」(エン・アルケー)

と書いてありますが、ここでは「太初より」(アップ・アルケー)ですね。

「太初より有った所のもの」

ギリシヤ語では「オー・エン」と言いますが、太初から存在しているから、これは、

「太初に言あり、言は神と偕に在り、言は神なりき」

という「ロゴス」という「言」、これが即ち

「太初より有りし所のもの」

このギリシヤ語は中性の形で言っているわけですが、具体的に「ロゴス」というときには――勿論、この「ロゴス」という言葉は文法的には男性ですけれども――「有りし所のもの」という、始めから存在していた実存、実際に在った、常恒的に在ったわけです。ですから、ちよつと掴みにくいですが、「有りし所のもの」というのは、そういったまだ我々の普通の相対的な現実よりも以前の世界は。とにかく実存していたところのもの。

そして、いきなりヨハネは、

我等が聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの

と言って、今度は相対的現実に見われてきたものを言っているわけです。超越的な現実にあった所のもの、言なる実在、それが今度は、

「聞きしところ、目にて見し所」

というんですから、これは相手は人格的な存在です。いうまでもなく、受肉されたイエス、キリスト・イエスのことです。キリスト・イエスが超在であって、またここに相対的な存在として現われてきたもの。それをヨハネは全く同じものとして言っているわけです。論理的連関も何もない。

「即ち生命の言」

という。「即ち生命の言」というのはむしろ、



「太初より有りし所のもの」

の方に、内容的にはかかつていくわけです。この言は即ち生命の言である。活ける言である。活ける書である。

この生命すでに顕れ

この生命なる言が既に顕れ、

われら之を見て証をなし、その曾て父と偕に在して、

ヨハネ伝第1章のところに、「父と偕に」、

「その言は神と偕にあり」

父神と偕にあつた。父なる神と偕にあつた。

父と偕に在して、今われらに顕れ

現実到我々の間に、この五感の世界に顕われ、

今われらに顕れ給える永遠の生命を汝らに告ぐ

この人格者は即ち、永遠の生命体です。滅びないところの生命体である。これを汝らに告ぐ、というわけですね。

●視れども見えず

東洋の思想には、支那には老子、荘子、孔子というような偉大な人たちがいましたが、特に老荘というものは支那の民間においては、むしろ孔子よりも深い影響を与えていると見てよろしいようです。

昨日、支那の留学生が遊びに来まして、少し私も聞いてみたら、やはりそのように言っておりました。老子の14章のところにこういう言葉がある。

「視之不見、名曰夷。（これを視れども見えず、名づけて夷という）

聽之不聞、名曰希。（これを聴けども聞こえず、名づけて希という）

搏之不得、名曰微。（これを搏えんとすれども得ず、名づけて微という）

此三者不可致詰。故混而爲一」（この三者は致詰すべからず。故に混じて一となる）

〔見ようとしても見えない。これを夷と呼ぶ。〕

聞こうとしても聞こえない、これを希と呼ぶ。〕

触ろうとしても触れない、これを微と呼ぶ。〕

この三つは追求の仕様がない。なぜならそれは全く同じものだからだ。〕

「之を視れども見えず、名づけて夷という」

と。視るけれども見えない。老子は、「道」ということを言いましたが、

「太初に言ありき」

の「言」という字を旧い訳では「道」とも訳してある。

「始めに道あり、道は神と偕にあり、道は神なりき」



と。「言」は「道」と書いたつてかまわない。けれども、これは老子の言う通りですね。いわゆる虚無思想――老子をいきなり虚無思想というような言い方をするのは非常な誤解を招くおそれがありますが――勿論、「無」ということを非常に言っております。いわゆる近代人が考えるような虚無ではない。その道が、

「無をもつて体とする」

というようなわけです。無が即ち体である。この「夷」というのは、平らかな意味だそうです。何か平べったくて漠然として、一向わからない。それから、

「之を聴けども聞こえず、名づけて希と曰ふ」

「希」というのも、無き如く有るが如きというような、そういった姿だそうです。だから、聞こえるか聞こえないかわからない。それから、

「之を搏つども」

この「搏つ」というのは、つかまえるような気持です。けれども、「微」というので、非常に妙、軽妙であつて、掴むに掴みがたい。

「風は之を捉つれども捉つることを能わず」

なんていうが、握つてみても風は一向つかまらない。風は吹いているんだけど。旧約聖書の伝道の書の第1章の中に書いてある。そういった、

「夷にして、希にして、微で、一向見えないし、聞こえないし、掴めない。この三者は

致詰「物事をつきつめてはつきりさせる」できない。」

それをとどのところまで究めて、つきつめるわけにいかないという。

「故に混じて一と為す」

と。これらは渾然として、一を為して、それが道の道たるところである、といったようなわけです。道を概念規定したら、もう老子の世界から一步ズレてしまふ。概念規定できないところのものを掴むんだと、そういうところは少し禅宗と似たようなところもあります。やっぱり、瞑想、悟り、といったような角度が強い。荘子になると、もう少し具體的な気持が出てきますけれども。

正直、私たちが「神」と称うるところのものを、聖書が「神」と言っているところのものを、もし私たちの側から神を探れば、この老子と同じことを言うのが本当です。

「神様はどうだ？」

といったつて、これは困る。ところが、聖書は啓示の宗教で、この前も書きましたが、正に「逆徴」でありまして、徴の世界です。徴そのものにこだわるのでは絶対にありませんが、徴に、現象において本体が現われる世界です。

●大事なことは根源相の体験

ここに花がある。花において太陽の光という捕捉することのできなものが、そこに現象



している。花において太陽の光を見る人は、花を見る人である。そのように、一つの野の百合を見て、神の栄光をキリストは観た。即ち野の百合において神の栄光を観たキリストは、この現象において本体を見ている。

ところで、この現象において本体を見えるというその本体が、まじり気なく、純一無雜、全的に現われたものが、これはこのヨハネが言う通り、イエス・キリストである。

「我を見し者は父を見しなり」

でありまして、即ち、

「我等が聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの」

使徒ヨハネは非常にキリストの「懷に倚つた」とまで言われるような非常にイエスと深い交わりをしたところの使徒であります。けれども、ヨハネがいくら感覚的にイエスと間近に手を握り、言葉を交わしても、それでヨハネはキリストを見たというわけにはいかない。そういった、ただ五感に訴えている世界をここで言っているのではないですから、そこは誤りないように。もしそうであるならば、このヨハネもペテロも、じかじかに現われているところのイエスにおいて、福音書のイエスに躓かなかったはずですよ。

ところが、あのように、

「つらつら視、つらつら聞き、つらつら手にて触れる世界」

にありながら、彼らはみんないつぱん躓かざるを得なかったではないですか。これはいわゆる感覚的な体験と、もつと深い相の根源相との体験とは違う。よく「体験宗教」というようなことを言いますが――私たちが一面において体験を重んじますけれども――それは感覚的な体験のことを言っているのではない。感覚の世界もありますよ、勿論。我々は感覚的な存在だから。けれども、大事なことは根源相の体験です。根源相における根源的な体験というものをしなければ、この聖書の預言者や使徒たちの世界ではない。

根源相の体験は、いくら私たちがそれを体験しようと思つて、瞑想したり勤行したつて、これは体験できない。それは今度は、いわゆる神秘宗教になる。そこがまた大事なところで、当時のグノーシス派の直観的体験の世界は、それを前面に出していた。そこで使徒ヨハネは、このヨハネ書翰においても、グノーシス的な知的な角度の直観の体験を否定し、絶対、恩寵の啓示の角度からの具体的な世界をここに現わした。

それと同じように「グノーシテイスムス」〔註グノーシス主義 Gnosticismus は、1世紀に生まれ、3世紀から4世紀にかけて地中海世界で勢力を持った宗教思想。グノーシスは、古代ギリシア語で「認識・知識」を意味し、自己の本質と真の神についての認識に到達することを求める思想で、物質と霊の二元論に特徴がある〕というのがありまして、キリストが地上に顕われたのは、これは仮頭であつて、受肉したということは一つの幻の如くにとつたところの人たちもある。それもい

かん。

さりとて、ヨハネ等の言っている体験は、単なる人間の主観的な、五感的な、ただ体験



を言っているのではない。勿論、その面も現象面にはありますよ。けれども、大事なことはその奥の世界の体験が本当にその現象を通してつかまえられるかどうかにかんに大事なことがある。それは私たちが主体であつたら、その体験はできない。根源相の体験というのは、根源相から来ているものによつて体験せしめられる。だから、

「我等が聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの」

というのは、福音書におけるところの、相対的なイエスとの交わりの世界をただ言っているのではない。イエスの方では、語っていますよ、使徒たちを視ていますよ、使徒たちにも按手をしましたよ、触れましたよ。けれども、使徒たちは、また群衆はイエスを本当に視ていない。イエスを本当に聴いていない。イエスを本当に触れていない。だから、キリストの側からいえば、

「視る目ある者は視るべし、聴く耳ある者は聴くべし、触る手ある者は触るべし」

と、イエスの側からはいつもこの嘆きがある。それが本当に見え、本当に聴こえ、本当に触っていたのは、このペンテコステ、聖霊の降臨以後です。

勿論、その現実から福音書は書かれていますよ。けれども、福音書において展開されていたものとの現実とは、いつもキリストの側からは見えているけれども、こつちからはヴェールがかかっている。だから、ヨハネが、

「つらつら聞き、目にて視、つらつら手にて触りし」

というのは、その当時は感覚的に見、触り、聞いていたが、しかし、聖霊が来てみると、本当にあの時は見えなかったことが見えてきた。感覚的体験がもう一つ奥の深層体験になつてきた。それは甦つて新しくヴェールがとれてくる。

私も、相対的な意味ですけども、私の亡くなった兄が聞き、言い、また為していたことはその当時、つらつら聞き、つらつら見ていましたけれども、その真義はわからなかった。けれども、兄が死んでしまつて、現実がそこに開示されてあつたから、初めて新しく、このことが言える。これは本当の現実。本当の体験です。主観的体験でない。だから、これの証言というものは、これは誰がなんと言つても、これは否定するわけにはいかない。これを否定することは、自分の主観や自分の意見を否定しているんじゃない。神の事態を否定することになるから、これはできない。聖霊の事態に逆らうことになるから、これはできない。これが即ち、使徒たちの証言の世界なんです。

現在のキリスト教、一般の聖書の掴み方は、その角度に本当に自覚しつつあるか。私は掴んでいるなんて言いません。私は限りなくその中に掴まれたいだけです。私は限りなくその中に見せしめられたい、聞かせられたいという世界に、ただ投身していくだけです。

いわゆる研究とか、いわゆる瞑想とか、いわゆる科学的判断とか——それは一応、解明はしますよ——一応解明するということと、それを本当に受けとつているということは別



問題です。天界に在ったところのキリストは地界にそのように根源現実として現われてきた。ここにおいて初めて神が自現されていた。パウロみたいに言うならば、

「わが目より鱗の如きもの落ちたり」

というときから、パウロは本当に視えてきた。それまでのサウロはどんなに素晴らしいサウロであつてもダメです。

●コイノニアの幕屋構造（三角錐体G・XABC）

そういうわけで、御霊のバプテスマというものは、これは絶対に通らなければならぬところなんです。それまでの信仰も、それは信仰でないとは言わない。けれども、この聖霊のバプテスマを受けていかなければ、聖書の現実に関わりなく近づいて、その中に入っていくわけにいかない。また、この聖霊のバプテスマを受けつつ入っていくのです。入りつつ、また受けつつ入っていく。それで初めてこのところが、しっかりと、皆さん、つかめるでしょう。

ところが、この老子の言っている限りにおいては、深い真理の世界はこれでいい。間違いないと私も思います。けれども、残念ながら、無といわれるところの道が本当に体と化する世界は出てこない。老子は自分でそれが、ある程度、体になったでしょう。けれども、それはある程度なんです。しかし、その体を本当になさすものは、神の子キリストのほかにない。

そこに私たちが真に無的でありながら、その無限の世界に入られ得るのは、正にキリストという生命の言、それ自体、神の生命の表現としての言、神の生命の表現としてのキリストです。二千年前に居た使徒たちも実は、単なる相対的現実ではどうにもならなかった。これは、

「肉の欲によらず、血筋によらず」

上から来て示されたところのものである。

「人新たに生まれずば」

というのはそのこと。ヨハネ伝に散々書いてある。この生命にぶつかるのは、御霊のキリストにぶつかなければダメです。いくらギリシヤ語を勉強したって、ヘブライ語を勉強したってダメです、神様の根源語にぶつかなければ。いいですよ、皆さん、この日本語で。日本語の誤訳だらけの聖書で結構です。その先から本当のものが光ってくるから。

2——この生命すでに顕れ、

すでに啓示されて——この日本語でははつきり今、見る人は見ますけれども、非常にこれは名詞的な表現でもって強く言っておりますから——

われら之を見て証をなし、その曾て父と偕に在して、今われらに顕れ給える
永遠の生命を汝らに告ぐ——



「生命の言」「永遠の生命」、これはみな同じことです。ヨハネ伝に、また創世記に「光」と言ったのは——ここにも光が出てきますが——霊の生命です。霊の生命ですが、これは体をなしている。幽霊ではない。さっきの「グノーシテイスムス」というのは、非常に霊、いわゆる直観的な霊の、瞑想の霊の世界を重んじて、体的な面を非常にひくくみて——ちょうどあのギリシヤ的な思想と同じで——

「これ〔霊〕は牢屋〔体〕に閉じ込められたようなものだから、早くこの霊だけが遊離するような角度を尊ぶ」

ような、間違った禁欲主義的な角度になってくる。当時の東方の密儀宗教なんかと連関している。

3 我らの見しところ聞きし所を汝らに告ぐ、これ汝等をも我らの交際^{まじわり}に与^{あずか}ら

しめん為なり。

いきなり妙なことが書いてある。「我ら」と言ってますね。「交際^{まじわり}」(コイノニア)という、しよつちゆう言っている「コイノニア」という字です。よく教会では、教会の神学校なんかで言いますね、

「神の言は教会で聞かれる。その外で聞かれる言はろくでもないのが多くて困る」

と。まあそういう場合もあります。それを押しつめていくと、もうカトリック教会だけが教会みたいなことに論理的にはなつてしまふ。

私が何故、「幕屋」なんてことを言うか〔G(神)を頂点とし構成員ABCを底面とする三角錐体の図を描く。GX(神・キリスト)は垂線〕。このGX、神・キリストという垂直線、これがこの幕屋の大黒柱です。この神・キリストという垂直線があるから、そして、キリストが私たちと同じ平面に降りて来て下さっているから、実に深くこの杭は打ち込まれてあるから、だから「幕屋が」立っている。それで上から下へ生命、真理、あらゆる恩恵がやってきます。この恩恵が素晴らしいものだから、Aから溢れてBの方に流れていく。同じくBからAの方にも流れていく。同じく、CからB、BからC、AからC、CからAというような具合に、この共同体にみんな上〔G＝神〕から来ているんです、上から。制度的な「教会」というものは、ABCという社会、共同体、ゲマインシャフトというものがあつて、そして、「そこ〔教会〕において〔神の言が〕聴かれる」

という言い方はややもすると硬化してしまふ。みな個人でいい。個人でいいんですが、今度はいわゆる無教会主義が陥りやすいところの個人主義は勿論ダメです。個人に直接に来るんです。預言者たちはどうかというと、神エホバから、

「御霊がわがうちに来たれり」

と言って、彼らはその御霊が来たのを私していましたか。いや実に、神の言を彼らは実存をもって伝えざるを得なかった、四方八方へ。上から本当の生命が、勿論この神・キリストの線を通してやって来ますから、これはどうしても横に行かなければいけない。私し



てAがAとして恩寵、恩恵というものをしまっていたならば、これは腐ってダメになってしまう。これは流れて来なくなってしまう。これはもし、しまっておいたならば、小さなAの中で溢れいっぱいになったら、ダメですよ。そうしたら、上から入ろうとしたって、入れなくなってしまう。

「私はもうこれでたくさんです」

なんて言ってる。ところが、上から来れば、これはつき抜けてこのAを破って、Aなんていう殻を破って、BでもCでもDでも無限に展開していく。生命は流れていく、吹き出ていく。だから、そこにはコイノニアがならざるを得ない。コイノニアとは教会の原始の相です。エルサレムの教団は原始教団です。原始教団の交際の世界が即ち、コイノニアの最初の世界です。いや、それよりも一つ言えば、イエスがじきじきに弟子たちを相手にしておられたときに、既にコイノニアの原始形態があった。しかしそれは、聖霊をまだ受けていなかったから、躓いたり転んだり、まあしうがなかった。終いには散ってしまった。しかし、それは散っても、上から御霊が来たら、本当に今度は一つになった。いっぺん散って、キリストに躓いて、十字架に躓いて、

「ああ、イエス様はどうとう十字架についてしまったか。しょうがないな」

というわけで、みんな失望落胆。ところがどっこい——これはキリストの生命が、復活のキリストが現われない。せつかくロゴス・キリストが現われたんだけど、そいつが分からない——最後に十字架を通して、復活のキリストが現われたら、今度はやっと分った。そして、十字架の意味がそこから逆にわかってきた。

私たちの、神と結びつくことのできない、キリストを受けとることのできない、その罪。神と結ぶことのできない、キリストを受けとることのできないのが「罪」ですから。その人間の罪の象徴ですよ、この十字架というのは。十字架というのは人間の罪の象徴です。罪の究極はあのキリストを十字架したこと。けれども、罪の象徴である、罪の結晶であるところの十字架が、逆に恩寵の結晶として、神様がこれに与えているというんですから、驚くべき事態なんです。

十字架によつてはじめて彼らは結びついたんでしょ。即ち、実はこの柱(GX)は十字架の形ですよ。この十字架の柱が立って、聖霊の光がこの幕屋の中に充滿してくる。キリストの復活の生命と共に聖霊の光が充滿してきた。だから、これはコイノニアならざるを得ない。「我ら」と言わざるを得ないのはその意味です。始めは「我」です。

「我(わが)に在り」

と。モーセも、エリヤも、イザヤも召命を受けたところの人たちはみな「我」です。キリストも神とたたひとりで「我」です。けれども、その「我」はそんな小さな我ではない。突き抜けさせられてある。我が引っくり返された新しき我ですから。新しき我は、「我ら」にならざるを得ないところの我であつて、決して「我」といつて主張しているようなもの



ではない。

私たちは一つの幕屋です。武蔵野幕屋というのが小さな殻に入ったらダメです。そんな幕屋は常に破れていなければダメです。その特殊性を本当につき破った交際^{まじわり}ができるかでないか。それはいわゆる信仰ではダメ。そこには本当にキリストの生命が、御霊の生命が溢れていなければ、それはダメだ。いくら力んだってダメです。これはこのイエス・キリストの生命が私たちをつき破って、進んで下さるから、皆さん、楽なんです。なんにもパリサイでなくなってしまう。

それぞれみんな結構です。大いに特殊な在り方で結構です。けれども、特殊性の奥に特殊性をつき抜けているところの絶対性を持っているか。絶対性とはキリストの御霊です。御霊はそれぞれの現われ方をする。太陽の光は、赤くなったり、黄色くなったり、いろいろな花に現象します。けれども、これはすべて間違いない花です。造り花ではない。そのようなわけで、皆さん、この交際^{まじわり}というのは作って、

「コイノニアをこうしなさい、ああしなさい」

と言われるうちはダメですよ。仕方がないから時々、私も言いますよ。今日もあとから小言を少し言いますけれどもね。小言で動いているようではダメです。奥の世界から、せざるを得ないような動き方にならなくては。もう皆さんが相当のところに来たと私は思うから、また新しく小言を言いたいと思う。

これ汝等をも我らの交際^{まじわり}に与らしめん為なり。

クリスチャンは、みな伝道者です。「万人祭司」というのは、どのクリスチャンも祭司であるということはヘブル書に徹底的に書いてある。コイノニアというのは、

「さあ、これから幕屋はもつとコイノニヤを〔盛んにして〕……」

なんて、ただ誠律で言っているようなことではダメです。新しい方々が来られたら、本当にその人と、十年の知己^{ちぎ}の如く交わるだけの靈魂のつき抜けが起きてこなくては。

●祈りも大自然のごとく

この間、ある青年がうちの集会に入ってきた。私はその青年がまだちよつと固いところが見えたから、終りの祈りのとき皆さんに、

「短く祈りなさい」

と言った。ところがどうも、つい長くそして

「お父様！」

を少し連発した。それは新しい人には躓きになったようだ。

「父の名を妄^{みだ}りに挙^あぐべからず」

ですから、祈る時にもあまり妄りに挙げてはいかん。いろいろな方がおられますから、パウロが、



「^{よろ}宜しきに^{かな}適え」

と言った。皆さんはもうある段階に来ているから、そういうことがもつと自由にならなければいかん。静かに深く短く、躓きを起こさないように祈って戴きたいと思う。何も私は、

「祈り方そのものに気をつけよ」

なんて、そんなことを言っているのではない。どういう時にも自然に、信仰のまだ初段階の方がおられたら、それをいたわる角度から、そういった祈りが^{おの}自ずから出てくるものです。また、志を同じくした人たちが、特に祈禱会というようなところで、深く強く祈る時は、また祈り方が自然に別な角度にもなつていきます。そこは自由自在です。

大自然も、昨日は嵐が吹いたではないですか。今はまたそのうちにケロッと静かになつてしまふ。大自然というものは驚くべきいろんな相をちゃんと持っている。だから、自然はこんなに素晴らしいじゃないですか。決して一様一態ではない。皆さんの靈魂の在り方がこの自然の如く自然にならなくては。それはキリストという驚くべき根源自然を戴きますと、それができるようになる。キリストは決して神学の概念でなんか絶対につかまらん。生命の言、永遠の生命ですから。

しかし、その青年は非常に不作法にきつと立つて、集会から出ていったから、私はなぜそういうことをするかと、ある人を通して問わしめた。葉書で言ってきました。祈りに躓いたこと、祈りがとてもたまらなくて居られなかったから、つい憤然と出てしまったという。それは私も、私が司会者として悪かった。私は返事を書いてやった。

「祈りにもいろいろな型がある。しかし、君は祈りがなんだかおかしいといつて出ていったけれども、君の出方もおかしいではないか。もう少し終りまでいて、どういうことだか私に尋ねたら、よく説明してあげるのに」

と。しかし、パウロは回心させられた時に、パウロはぶつ倒れました。単なる体裁の世界では、靈魂の世界はどうにもならないということとはよく知ってもらいたい。

これ汝等をも^{まじわり}我らの交際^{あずか}に与らしめん為なり。我らは父および其の子イエス・

キリストの交際^{まじわり}に与るなり。⁴此等のことを書き贈るは、我らの喜^{よろこび}悦の満ち

ん為なり。

「父および其の子イエス・キリストの交^{まじわり}際」

とある。交^{まじわり}際、コイノニヤというものは、どんなにそれが兄弟姉妹の交際でも、そのコイノニヤの中心には、主人公が父であり子であり、そして事実、そこに働いてあったもうのは御霊の神である。その三位一体の神がこの交際の常に主体であるということの間違えなように。だから、「これに与らしめる」という。

●渾然有機体的な円環関係

⁵我らが彼より聞きて、また汝らに告^{おとずれ}ぐる音信は是なり、



「彼より」というのは勿論、イエス・キリストから聞きました。けれども、本当にそれが聞くに至ったのは、御霊を通して聞き得るに至ったのです。

「彼より聞く」

というけれども、私たちは聖書から聞きます。聖書を読みます。聖書に書いてある神の言を読んで、いや「読む」というのは実は聴くことであると申し上げました。ただ眼で読んでいるではありません。じきじきに私たちに語りかけている言ですよ。しかしながら、その「聞く」が即ち――「読む」のは聖霊の光で読んでいる――聞くならば、聖霊の言として聞いているわけでしょう。それでなければ本当に、

「聞けども聴こえず、見れども視えず」

と申し上げている通りです。

また汝らに告ぐる音信おとずれは是なり、

この「音信」という「アンゲリア」という字はここと、3章11節にしか出てこない。

即ち神は光にして少しの暗き所なし。

ラテン語でいえば、

「デウス・ルックス・エスト」「神は光なり」

という。「ルクス」というのは光の単位ですね、Lで表わしている。この「光」という字を単位にしている。同じ書翰で、

「神は愛なり」

と言いました。また、ヨハネ伝の始めの方にも、

「恩恵と真理とにて満てり」

とある。神は光であつて、その光が世に現われてきた。また神と偕にあつた言は光であつて、それが世に現われてきた。言は光で、生命で、世に現われてきて、それは恩恵と真理とに満ちていた。もう畳みかけていろんな言葉で言う。それを並立的に考えてはダメですよ。これはグルグル回っている関係です。神は光で、キリストは子で、聖霊の交わりという世界が愛の世界です。そして、これもまたグルグル回っている。両方とも。だから、今度はこちつちが光になってみたりする。

「神が光であつて、愛からは少し違う」

なんて、そうじゃない。これはまたこちへ回ってくると、神は愛になってしまう。光はまた愛に変わり、義といつてもいい。子は生命の言――なんでもいいです――これはパウロでもヨハネでもみんなそういった表現は円環関係でグルグル回っているようなものです。概念で妙な

「厳密に区別する」

といったって、厳密に区別するのではない。むしろこれは厳密に繋ぎ合わせて下さい。「厳密、厳密」とよく言うけれども、イエスの宗教の世界は渾然有機体的ですから。



即ち神は光にして少しの暗き所なし。

「光」というと、電気の光も光ですよね。けれども、皆さん、この太陽の光を見ていれば、太陽の光は無色でありながら——色がない、色がついていない——しかも熱を持っている。あったかい。ドイツ語では太陽は「デイ・ゾンネ」といって女性で表わしている。無色でもって熱を持っている。冷たい光でなにか偉ぶって、

「お前はそこが悪い、あそこが悪い」

なんて人を審くような光ではない。それが冷たかったら暖めやる、それが曲がっていたら直くしてやる。それが腐っていたら息を吹き返さしてやる。そういう光です。無色透明の聖なる光だから、神の聖なる光は——悪魔も光を持っているけれども、それは恐ろしい光です——神様の聖なる光は素晴らしい熱を持っている。相手を本当に生命づけるところの愛を持っている。この光は生命を持っている。その生命の質は愛である。だから、生命の質が愛であるから、さっきのコイノニヤがいくんです、交際が。愛でなかったら、交際はできない。世界がなぜこんなに争うか。疑うか。本当に愛をもつて交わろうとしないからです。

私はカトリックへ行こうが、どこの教会へ行こうが、誰とでもつきあいをしたいつもりです。一つも隔てはないつもりです、こちらは。それは突き抜けだから。自分の主義も主張も立場も何もありません。キリストは無限なんだから。もし言うならば、無限の立場さ。それは捕捉することのできないものです。だから、どこへ行ってもそれと交わることができる。本当にそれと溶けていくことができる。向こうに本ものがあればですよ。本ものがなければ、本ものにしようとはしますけれども、向こうで

「いやです」

と言って戸を閉じてしまえば、仕方がない。私は無教会の人たちから少し——全部戸を閉じているとは言いませんけれども——大分、戸が閉まっているような始末ですよ。けれども、いいです。どうあってもこっちは楽なんです。それらの者にキリストは、

「私は戸の外で叩いているよ。さあ、お前、開きなさい。そうしたら、一緒に

御馳走を食べよう」

と、そういう豊かな交際の世界です、キリストは。ヨハネ黙示録に書いてある。聖なる光は生命づける愛の光であるということの間違えないで下さい。

光は素晴らしい義の太陽とまでいわれる義であります、義が即、愛なので、義と愛がなにか並立したようなものではない。ちゃんと重なっているんです、義と愛というのは。

従来の私が育ってきた無教会では、ちよつと義が強すぎる、いわゆる義が。それはいかん。それは義がなにか正義みたいな義になつてしまうからいかん。義とは、申し上げている通り、神とキリストとの交際が、愛が本当に神の聖意としっかり身に体して一つになっている相^{すがた}を義という。



「汝の聖意みこころを成させ給え」

という現実が義なのです。聖意が現成していく世界が義なのです。何か義という道德的概念が義ではない。

そういうような事態が即ち生命ではないですか、驚くべき愛の交際の世界ではないですか。キリストは限りなく、キリストの教会が全世界に世の涯までも、どんなに教会そのものが惨憺たる現実でありまして——私たち教会というのはみな惨憺たるものですけれども——キリストの能力ちからはどんなにダメな者も、なお信じ、なおこれを耐え、なおこれを忍んで、最後の日に至らんとしている。

●イエスという光体を通して神に直結

だから、皆さんいいですか、交際まじわりといったら、キリストが私たちに交わって、私たちの間に交わって下さる交際だから、これは本当に問題の行き詰まりを知らざるところの、溶かして止まないところの、願って止まないところの交際である。どんなにお互いさまに躓き転んでも、先生から小言を言われても、どっこい展開していくところの交際である。そういうようなわけで行くんですよ。

だから、キリストの中に入ったらば、この交際ということが本当になる。それはどこに書いてあるか。ヨハネ伝第15章です。ここで交際のことは、私が「真の葡萄の樹」というのを、あの『愛泉』誌に書きました。あれは大事な文章ですから、時々、繰り返して読んで下さい。

私も自分で書いたものを繰り返して読む。それは私は自分でものを言っているのではないんだから。私はそれから学ぶんです、自分でまた新しく。自分で書いたものにラインなんか引って張っている。馬鹿みたいなものです。これは神様に示されて、ものを言ってるんだから。人間小池は神様の聖言の角度からまたこれを学ぶわけです。だから、語るも聞くも同じこと、ただキリストを学ぶということ。

この「真の葡萄の樹」というのは『愛泉』誌の第6号〔註：1956/9/16発行。本文庫の「著作／愛泉」の頁に掲載〕にあるので、もう殆ど残っているのがないかも知れませんが、これは非常に重要な証言の一つですから、皆さん、またよく読み返してみして下さい。

「我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。我に居れ」

と。この葡萄の樹から滾々と、樹の幹から脈々として流れているところの樹液を葉の末に至るまでみな受けている。そして、花が咲き実がみのつていく。葡萄の樹は詩篇80篇に、全世界にまでその枝を張るようなことが書いてある。イスラエルは神の葡萄の樹であるという、あの詩篇80篇は素晴らしいですね。

その葡萄の樹です。この枝々はみな連なっている交際まじわりの世界。それは概念的に交わっているのではない。生命で交わっている。共通の生命があるから交わらざるを得ない。共通



の生命はどのようにしてできたか。そのことはそのすぐあとに書いてある。

6 もし神と交際ありと言いて暗きうちを歩まば、我ら偽りて真理まことを行わざるなり。

キリストの生命を戴くというような世界、光を受けるといような世界は、単なる静的な世界ではない。

「光のうちに歩まば」

と書いてある。我らは進み行かざるを得ず、歩まざるを得ずという行動的な世界。実存的、行動的である。勿論、実存的行動的の奥は、この静的な世界がありますよ。ありますけれども、その静的なものも行為的です。ニールンデルという教会史家が私と同じようなことを言っているので、私は驚き喜んだ。

「神様との交わりは非常に深い内的な行為である」

というようなことを書いています。

「信仰は即ち内的な行為である」

と私はもうはじめから申し上げています。信仰一如ということ。信は即ち内的な全我を投じている世界ですから、これは内的な行為なんです。観念しているのではない。投身的な内的行為は深い静的な、ただ端座して祈って――私も夜、静かに端座して祈りますが――端座して祈っているところの世界でも、これは驚くべき行為的な世界なんです。それはイエスという光体――光の体です――このイエスという光体、光の体を通らないで私たちは神に直結したり、面接したりしてはいかん。それはいわゆる間違った神秘主義です。

祈りの世界でキリストを体受する。体で受ける。皆さん、祈りというのはそうですから。キリストを受けることをしないような祈りは祈りではない。私たちの願い、悲願、霊願の究極は何か。キリストを受けることです。

「聖意の天に成る如く、地にも成るように」

というのは、天界に在るキリストを、キリストという言をわがうちに受体せしめる。体からだに化体かたいせしめる。聖書の言が化体して、キリストという事態が私たちに化体することが祈りの事態なんです。ですから、キリストを受けとらないような祈りは危ない。

「我は門なり。我は道なり、生命なり」

と、そうでしょ、キリストは。

「我は光であり、真理であり、門であり、道であり、生命である」

と言われた。このキリストを受けとることが即ち、即、神との交わり世界なんです。これは祈りですから。

だから、祈りは決して行き詰まらない。私たちは祈りで行き詰まるのは、知らない間にキリストを抜きにして、自分の願いだけ祈っているから、行き詰まってしまう。自分の願いは大いに願っていい。けれども、その願いに絶して下さい。その願いに絶するところに



キリストのが現われてくれれば、今度その願いはもうひとつ奥の世界からキリストがかなえて下さる。願以上のことを与えて下さる。これは祈りが必ず勝利していく道なんです。私たちは最後には、死もなにも越えて行く。その時に、

「汝、われと偕ともにあり。汝おまが裡うちに在いまし給たまうが故に、我おれ懼れじ」

というところに普段から祈りがいつてないと、その時にあわてるでしょうね。ですから、普段から即ち死を体し、死を眼前にしての、死を突破しての祈りになつていなければいけません。私たちの祈りは。

そういう交際だったら、この交際を誰か破ることができるか。パウロがロマ書8章で言っている通りです。

6 もし神と交際ありと言いて暗きうちを歩まば、

暗き道は、交際にあれば歩めないんです。私たちはダメだから時々、暗き道を歩みますよ。歩みますけれども、どっこい、その時に眼を上げて下さい。靈魂の眼を上げて下さい。そうしたら、暗やみは退散していく。躓つまずいたり、転んだり、滑ったり、倒れたり、さまざまです。けれども大丈夫！ 光の中に倒れ、光の中で躓つまずいているんです。私たちは。光の外で躓くわけがない。光が来ているんです！ 来てるのに来てないような顔をして、そっぽを見るからいかん。うちを見れば、キリストの光体は我々の生きている奥の世界に来ている。

●キリストが中に入って下さる

大事なことはその次の第7節に書いてある。

7 もし神の光のうちに在いますごとく光のうちを歩まば、我ら互まじに交際まじわりを得、

これははつきり言っている、「光のうちに在います」と。神の光は遍照している。一切の人に光は来ている。一切の人に雨のうるおいは来ている。一切の人は空気を吸っています。ただその恩寵の所以をしらないでいるだけ。どんな唯物論者もみんな恩寵の下にある。

「私たちはクリスチャンだから」

なんて、そうじゃない。みんなこれはキリストの属もつなんです。ただキリストのものとして受けとらないだけの話なんです、みんな。神の所有もつとして受けとらない。そこだけが神様の方でその人に自由を与えている。人間は物じゃないから。そこなんです、問題は。恵みは来ているんだけど、それに、

「はいー」

と言つて、全身をもつて応えるかどうか。これだけとは残り残されている。それはご勝手です。どうぞご自由です。けれども、受けそこなえば、それだけのことになるだけの話。

世界が神様を受けそこなつて、いい加減なことをやって、大いに原子力は結構です。素晴らしい事ありますが、危なくてしょうがない。一歩間違えれば、とんでもないことになる。原子力という驚くべき文明の最高の利器がえらい危ないことを作り出してきた。そ



れを間違つて使うと、神様抜きにして間違つたならば、自ら審きを招く。神様は審きたくないんだけど、自ら審きを招いてしまう。終末の審判はそうにしてくる。

どうか、神に立ち帰らなければ、光の中にもういつペン立ち帰らなければ、光の主体であるところのキリストに——概念ではない——一切の限定を超えたところの驚くべきこの全キリストの中に、もういつペンキリスト教会が——

「誰がこう、彼がこう、どのキリスト教会がどう、あれがどう」

ではない——一人各々が本当に展開し、本当に悔改めてぶつつぶれて、この中に使徒的な角度から入って行かなければ。そうすれば本当に、

「光のうちに在すことく」

その光の中を、キリストの中を歩く。キリストの中を歩くためには、キリストが中に入つて来なければ歩けない。キリストが中に入つて下さる。キリストという光が、御霊の光が私たちの中に入つて下さる。光は生命にして愛であります。この御霊の光が私たちの中に入ってくる。

いくら、花が外側に陽の光を受けたってダメですよ。光がこの花びらの中に浸透しているから、花が花なんです。私たちがキリストを浸透していないようならば——

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と、パウロがローマ書8章で言っている。御霊を宿す、光が浸透している——即ち我々自身、一人ひとりが光体とならなければ、これは本当の交わりが展開していかない。

また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。

「また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔めつつ行くのである」

と。「潔む」という現在形は常に「潔めつつある」ということ。私たちは潔められ、既に罪から贖われている。神様の側からは「潔め」ということは、贖罪と同時^{あがない}に完了している。贖罪と同時に完了しているけれども、その潔めは、またその贖罪は地上では現実には完了しない。この現実には完了しないという面ばかりを見ているものだから、

「私は未だ救われ方が足りない。私はまだ潔められ方が足りない」

なんていう、情けない現実ばかり見ているからダメなんです。これを見ていたって、いつまでたってもダメですよ。そうかと思うと今度は、

「私はここまで潔まりました。大分よさそうです」

なんていうことになったら、これもダメです。本当に見なければならぬのは、キリストの贖罪と潔めとは根源的にあの十字架において完了している。完了しているからその完了している素晴らしいものを日常に新たに受けとることによって、この贖罪はその完結の世界に向いて行く。

「汝は既に贖いとられてある。それが故に、いよいよ贖われていく」

というんです。決して二段構えではない。生命は来ているんです。



病気でもそうです。私たちはすべてキリストを受けとったからには健康者である。キリストの永遠の生命が来ている。皆さん、いろんな欠陥があります。私も欠陥がありますよ。その欠陥はすべてとり除かれてある。霊的な欠陥も、靈魂の欠陥も、肉体的な欠陥も、すべてとり除かれてある。これは二千年前に十字架と復活が完全にこれをなし遂げたので、これは絶対に水を割ってはいかん。これは絶対恩寵です。この絶対恩寵が来ているから、「さあこれに乗っかってごらん、いよいよそうなっていくよ。躓いても転んでも大丈夫だ。さあ私を受けとっていきなさい」

というのが、この驚くべき律法ならざる恩寵の力の世界です。恩恵めぐみの力の世界です。それでなければ、私なんかとうてい望みがない。これに來たから有難いですが、何だか知らんけれども。そういうわけで、光に、光の中に在るんですから、

「既に光の中にあり。汝らは光の子である。汝らは世の光なり。故に、いよいよ世の光とさせてやる」

と言うんです。

「お前はだんだん私を受けて光となりなさい」

なんて言っているのではない。それでは、

「私たちは一生懸命で受けましょう」

といって、いわゆる努力精進になる。「信仰＋行為」になる。そうではない。信仰、行、即信の世界であって、キリストの恩寵が私たちを推進させていく。これが、十字架を常に新たにいよいよ深く受けていくこと。キリストの復活の生命を、その聖霊をもつていよいよ深く受けていくということです。

「十字架・復活・聖霊は絶対に離すことのできない一如の恩寵の世界である」

と申しあげる所以であります。

●観念に非ず、御利益にあらず

ゼカリヤ書13章を開いてごらん下さい。ゼカリヤ書というのは旧約の少し後の方です。

「その日罪と汚穢けがれを清むる一の泉ダビデの家とエルサレムの居民きよみんのために開くべし」(ゼカリヤ13・1)

というのが、主イエス・キリストのことです。キリストの來臨のときに、

「罪と汚穢けがれを清むる一の泉がダビデの家とエルサレムに開くべし」

この恩寵の世界は過去完了から現在完了へ、未来完了へと進んでいく。未来完了は終末の意味です、神の国の來るとき。即ち、恩寵が受けとられつなければ、どうして希望が希望であるか。それでなければ、願望に過ぎない。そんな空想ではどうにもならない。我々の中には希望の確かさが来ていると申しあげている通り。希望の確かさは、この救いの確かさ、キリストの十字架・復活の恩寵によって来ている。



アタマで受けたってダメですよ、理解されたってダメです。それは悪くはない。悪くはないけれどダメです。これは全身で受けとって下さい。「これでいい」なんていう世界はない。限りなく受けとっていくことです。

「私は空気をもう吸いましたから、もうあとで吸わなくてもいいです」

なんて言ったら、窒息してしまう。いよいよ吸って下さい。いよいよ空気を吸って、いよいよ生きていく。そのように、キリストの十字架・復活・聖霊は、私たちの霊魂が呼吸していく世界です。これはたましいの呼吸の世界です。

そうしたらば、霊魂が呼吸してきますから、このキリストに血によつて。キリストの血を、ちやうど私たちが食物を食べるように、空気を吸うように。

「我は生命のパンなり、わが肉を食らえ、わが血を飲め」

と、みんなそれです。なにも洗礼、聖餐ばかりでなくていい。私たちは洗礼も聖餐もしないけれども――したって結構ですけれども――問題は形式ではない。本当にこの御霊の生命を、霊の生命を受けているかということなのです。

ヘブル書の9章をちよつと開いて下さい。9章11節から22節までは非常に大事なところなのです。

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ

此の世に属せぬ更に大なる

高次なる、

全き幕屋を経て、¹²山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。

永遠の贖罪を終えた、その徴としてエルサレムの神殿の幕が上から下まで裂けてしまったではないですか。もはや大祭司がある必要がない。キリスト自ら大祭司であり、キリスト自ら¹³煮てありますから。これは、ひとたび完了したんです。

永遠の贖罪を終えたまえり。¹³もし山羊および牝牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、¹⁴まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。¹⁵この故に彼は新しき契約の中保なり。」（ヘブル9・11～15）

「これはわが血である、わが肉である」

といって、最後の晩餐でなさった事態は、私たちが終末の日に至るまでこれを現に、日々身に受けとっていかなければならない。空気を吸うよりもキリストの霊気を吸う。ご飯を食べるよりもキリストの体を食べ、水を飲むよりもキリストの血を飲むということが、私たちの霊魂と新しき霊体の、新しき体の栄養なんです。

だから、すべての罪より、すべての病より既に医されてある。すべてに医されてあるから、



この世の病の消長がどうあろうとも、どっこい、永遠の生命で勝っていきます。肉体的な病がどのように消長しても、そして事実そのような力を得ていけば、病やいろんなものが癒^{なほ}ったりしますよ。私はなにも神癒というようなことを言っているのではない。けれども、そのようなことが現象してくる！ 聖意に従ってね。

そして、ちよつとも現象してこないようなクリスチャンがある。それは本当の世界に入っていないというよりかしようがないでしょう。ある意味において、ズレをきたしている。悪くはないでしょうけれども、何かズレている。それは人ごとではない。

「私たち自身が限りなくその中に入りましょう」というんです、限りなく。

「観念に非ず、御利益にあらず」と申し上げているのはそのことです。

8 もし罪なしと言わば、**是みずから欺けるにて真理われらの中になし。**

その通り。私は死に至るまで罪びとに過ぎません。罪びとに過ぎませんが、罪びとに過ぎない者が、いよいよ義とせられ、栄光づけられていく。

9 **もし己の罪を言いあらわさば、神は真実にして正しければ、我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給わん。**

潔められてあるから、いよいよ潔め給う。それでなければ、キリストはただ素晴らしい実存をもって、模範を示して、天界にいきなり行かれたらよかったんです。そして、

「キリストのようによいよ霊的になりなさい」

と。そして、キリストは一人の宗教的天才、預言者に過ぎない。キリストが救主であるということは、私たちが如何なる条件をも必要としないという、このことなんですから。絶対無条件の恩寵の世界から、私たちが展開させられていくんです。

「お前たちが一生懸命に肺をふくらませてごらん。そして、空気が来るから」

そうじゃない。空気は来ているから、私たちは肺で呼吸せざるを得ない。生きざるを得ないんです。

10 **もし罪を犯したる事なしといわば、これ神を偽者とするなり、神の言われらの中になし。**

人間の脱落存在、パラダイス・ロストをはつきりとヨハネは語り、そして恩寵をはつきりと掲げ、この恩寵において行くならば、限りなく進んでいくという、今度は驚くべき肯定の世界を道破していく。

●御霊の光を受ける場は祈り

それで一応終わるわけです。あと一言申し上げておきましょう。

イエス・キリストだけが光体です。我々の見ている現実では、太陽だけが本当に光体です。



みな光を受けたもので、私たちも受けていますけど、キリストだけが神の光を全的に宿しているところの体である。聖書はこの光体の証である。ですから、聖書という証言において私たちが光体につからなかったならば、聖書は読んでいるというわけにいかない。研究何もみな結構なことです。けれども、私たち自身は小さな一つの光体、

「汝らは世の光なり」

という。私たち自体がみな、一つ一つがみな小さな光体になる。朝の露の滴が太陽の光を受けて七色に光る。虹は太陽の光を受けて、あの素晴らしい七色の橋をもって、光をその中に浸透させ、反射させています。光を浸透させ反射させているような、そういう光体は、キリストの光は、いうまでもなく、霊光でありますから、

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもつてせよ」

と。キリストの光は霊の光ですから、聖霊の光、御霊の光を受けなければダメである。その御霊の光は、私たちがどこで受けるか。祈りの世界で受けなくては。そこで、祈りということが極めて大事です。御霊の光を受ける場合は祈りの世界です。御霊の光を受けて、それがいよいよ本ものであることを現わす場合は、実存の世界です。光の中を、光と偕に歩んでいく世界です。即ち、それがまた交際にもなる。さつきと同じ構造です。

この構造ははつきりとかまえて下さい。そして、祈りは勿論、個人の単なる祈りもあるし、こうやって交際の中で、

「二、三人わが名において在るところに、私もまた在るなり」

という、その幕屋の共同体の中においてまた祈られる。祈りには二つの面がある。

その祈りにおいていつも大事なことは、十字架をもって、十字架を通して、私たちが破られていなければ、この事態が入ってこない。

そこで、十字架の罪の贖罪ということが、本当に受けとられていなければ。受けとられていれば、私たちの中は空っぽなんです。無罪とされている世界ですから、復活のキリストの聖霊の生命が必ず来る。何も口で十字架ということを出さなくていい。けれども、その場合は——十字架はただ教会の上に飾ってある十字架ではない——私たちの体を貫いているところの十字架です。そして、光を受ける。それで私たちが本当に光体とされ、そして、この光体は流れて、光は流れていく。

「汝らは世の光なり」

と。そこで、毎日の生活で大事なことは、祈りであり、祈りの人となることです、その祈りの事態において深く。

●キリストにおける光体としての存在

キリストの山上の垂訓のところ、マタイ伝6章22節、

「²²身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。」（マ



タイ6・22)

「汝の目ただしくば」

というのは、

「汝の目が純一、単一ならば」

という意味です。汝らの目が純一、単一——単性といってもいい——私たちの肉眼は二つあるけれども、目が本当に光に対して、純一に、単一となるならば、全身は光に満たされる。

「全身あかるからん」

は、

「全身は光に満たされる」

というように訳した方が大分よい。全身が光に満たされる。

近頃出たインドの『第三の眼』という本がありますね。ああいう本はうつかり読むと、読み間違いしていきません。人間の眉間のあたりに霊的な眼の、霊眼の場があるそうです。そうすると、ものすごくすべてのことが明るく見えてくる。それは霊的なひとつの消息でしようけれども、そんなことは自覚されてもされなくてもいい。私たちの眼というのは、キリストを本当に私たちの霊魂をもつて見れば、それをもつて受けとつていけば、そのような霊眼が私たちの肉体に備わっている。私たちの意識の奥でもつて来ている。そこから、それによって、全身に光が満ちている。それはどこまでも十字架を抜きにしたらダメです。十字架の罪の贖い、潔めというものを、贖罪というものを抜きにしたら、それはダメです。インドにはそういったことが、無的な瞑想の世界からいくんでしょうけれども、私たちはそういったいわゆる無的な瞑想でなくて、恩寵の世界で無とされているんです。

万人が何か宗教的な修養をしなければできない世界ではない。万人が端的に幼な児の如く受けとることのできる世界です。皆さん、いろんな霊的な素晴らしい高次なことを読んでもいいけれども、そんなことでもつていわゆる心霊的な妙なことを探究してはいかん。キリストを福音的に深く受けて下さい。本当にキリストを深く受けていけば——アタマではないですよ——そうすれば、知らない間にそういうような世界に、何でもない在り方で行くんです、限りなく行けるんです。そして、キリストによるのでなければ、この最高の世界へ来ない。キリストによっているならば、皆さん、大学の先生よりも、本当にキリストによってものを見ている人の方が、本当にものを認識できる。

聖書は色がつかないで、正しく認識していくことができる世界です。どんなものを読んでも、それに囚われたり、躓いたりすることがなくなる。本当にキリストをその角度から受けていくとね。だから、楽になる。非常に広い世界です。何か小さな主義主張、教派というようなことでなくなってしまうから。

皆さん、その意味においては本当に自重して下さいよ。また正しい意味において熟していただかなくては困る。ダメだからこそ、キリストはダメでなくするんですから。無きが



如き者こそ、皆さん一人ひとりののびきならない存在を通して、それぞれ一人ひとりが他の者をもつて置き換えることのできないことにして下さるんですから。これが全世界とも換えることのできないキリストにおける光体としての存在。それは深い有機体となって、存在そのものをもつて、コイノニヤそのものをもつて、全世界の教会の大きなキリストにおける一つということにおいて、聖名を讃え、この悪の世界に対して光をもつて勝ち、また救い上げていく世界です。その一環を荷っているということの外、何ものでもない。自己を絶対視してはいかん。

そういうようなわけで、どうか大らかな大きな、そして弾力性のある信の世界に入ってください。これはヨハネがそのことを言っている。では、お終いにします。

● 祈り

一切の根源の光であり給うところの神様。主イエス・キリストにおいてご自身を光とし、生命とし、道とし、真理とし、愛とし、贖罪とし、聖として、在らしめて下さった神様。感謝いたします。

「主イエス・キリスト」と私たちが申し上げるときに、そこに限りなき内容が澎湃として迫って参ります。二千年前に親しく、この地を歩み、人々を憐れみ、病める者を医し、死人を甦らせ、盲者の目を明かせ、聾者の耳を開き、癩病人を潔め、靈魂の碎けたる者に、福音を伝え、

「およそ我に躓かざる者は幸福なり」

「聞く耳ある者は聴くべし」

と、懇ろに語り、懇ろに触れ、懇ろに現わし給いました主イエスさま！

福音書において、私たちはこれに真に、現に今もぶつかります。どうか、この福音書の現実を、過去の現実としてではなく、今、私たちが御霊にあつてこれにぶつかり、なんでもないこの現象の中にキリストの恵みを見、人の中にキリストの像を見、いろいろな人生の毎日の出来事において、そこに主イエス・キリストにぶつかり、御旨を悟り、つらつら聞き、つらつら見、つらつら触ることのできる歩み方をさせて下さい。

神様、そして本当にこの兄弟姉妹たちの中に、福音が化体し、キリストという福音が化体し給い、もはや説明の世界から限りなきものが展開していくことができますように願います。また、兄弟姉妹たちをそのようにお育て下さいましたことを感謝いたします。私たちのの中に新しき生命がきたり、新しき霊がものを言い、また一切ものを見て参ります。

主イエス・キリストのまことのお父様。霊の生命でありました。霊の愛でありました。霊の真理でありました。感謝いたします。どうか、この兄弟姉妹たちがいいよこの聖書を身をもつて読み、身をもつて聞き、身をもつて触っていくことができますように。実に根源現象、根源現実の中を深く歩み、深くキリストにおいて交際し、そして毎日毎日においていかなる事がきましても、嵐がきましても、倒れざるところの塔として立ち、燈台と



して光り、難破せんとする人々を救^{たす}げ上げていくことができますように、光を与えていくことができますように、助け舟となりまた燈台となることができますように願ひ奉ります。主イエス・キリストを宿すときに、これができます。私たちはいよいよキリストの前にぶつづぶれていきます。一人ひとりがのつびきならない姿をもって現われていきます。

キリストの神様、どうかそのようにして、教会も無教会もカトリックもありません。すべて、大いなる教会、大いなる体として、大いなる幕屋として、これを育て上げて下さるように。20世紀の危機を、真にこれを支えていくことができますように、願ひ奉ります。

誠に使徒たちは、その生涯そのものが証言でありました。私たちもまた、聖書が望むところのものは、私たちの生涯そのものが証言であり、証であることであります。しかるときに、澎湃^{ほうはい}としてキリストの聖名を讃え、また、キリストを讃美することのほか、なんものでもありません。

今日はまた、新しき一人の兄弟が、いろいろな事情を乗り越えてやってこられました。どうか、M兄弟を、いよいよ恵み、また祝福し、その教会において、そのお仕事において、いよいよ、キリストの証言体として、これを祝福し給わんことを切に願ひ奉ります。

お父様、私たちは本当に愉快です。全世界に友達を持ちます。イエス・キリストの御霊は、一切をなし給うからであります。感謝いたします。どうか、この秋の恩寵、いよいよ受けつつ、キリストの聖名を讃えつつ、進ましめて下さるように願ひ奉ります。集まれなかったところの兄弟姉妹たち、それぞれのところにおいて今日、覚えていると思います。みな、御霊にあつて一つです。

どうか、いずこにおきましても、キリストを証することが喜びであることができますように、願ひ奉ります。また、方々の療養所の兄弟姉妹たちが決して気落ちすることなく、皆これ医されてありとの驚くべき恩寵の世界から、彼らが力を得て行くことができますように願ひ奉ります。

今、心からの感謝と願ひ、御名により捧げ奉ります。アーメン。

